

◇◇◇◇◇◇議員のひとりごと◇◇◇◇◇◇

衣食足りて礼節を知る、ということわざ（中国の故事か？）がある。これはいくら礼儀や心掛けを説いても、ボロをまといロクな食べ物もない状態では何を言っても無駄、まずは生活の最低条件を整えることが先決、その上で、といったことになるか。政治家にとっては耳の痛い話で偉そうに道徳を説く前に経済を良くしろ、である。

しかし、しかしである。他方では一寸の虫にも五分の魂、人はパンのみにて生きるにあらず、といったこともある。人間、どんなに落ちぶれても人としての矜持、誇りをもっているものだ、単に食えればいいというものではない、となる。うーん、人は中々複雑だ。一筋縄にはいかない。

増え続ける社会保障費が問題となっている。単純に言うとサービスを抑制するか、税を引き上げるしか選択肢はない。細かく言えばサービスを抑えるにしても本当に必要なものと無駄なものを峻別して合理化すべき、となろう。また税の引き上げにしてもだれがどのようにどれだけ負担するかが敏感な問題となる。

社会生活上のコストを考えてみると昔はほとんど税金を使わなかったなあ、と思い至る。水は近所でモヤイで井戸を掘って使い、風呂は薪をくべ、生ゴミや糞尿は畑の肥料に再利用し、クルマは少なかったから道路整備の必要性は感じなかった。こういった生活が果して幸せだったかどうか、にわかに断じがたいが、少なくとも地域の自然的、社会的条件の中で長年月をかけて営々と形作られてきた結果であり、それなりの合理性を有していたに違いない。

これに引き比べ現代の文明生活を維持するには何と社会的コストのかかることよ、と嘆息してしまう。これからもこの傾向は続きコストは増えていくだろう。

では私たちはどうしたらいいか？やはり自分にできることは自分です、の自立の精神と、互いを思いやり助け合っていく共助の精神、この二つで乗り切っていくしかないのでは、と思う。

それともそんなことは飯が食えてナンボのこと、廃車や家電製品の山間投棄も、ウワサに聞く雨の夜の汚水の放出も仕方のないことだ、と考えるか。ただそのようなことを容認すると現実には必要以上の社会的コストとしてはねかえってくることを忘れてはならない。

